

い、実践した。三学年合わせて十七名での合同学習となり、一つのテーマについて最大十七通りの意見や価値観を交換することができた。

「同じ意見の人でも、そう考えた理由が少しずつ違って、おもしろいなと思いました。」「自分とは全然ちがう意見の人もいるんだなと思いました。ちがう意見も大切にしないといけないなと思いました。」といった児童の感想から、幼少期からずっと一緒に過ごしている仲間でも考え方が少しずつ違っていたり、異なる意見をもっていたりすることに改めて気づくきっかけになったことがうかがえた。今後ともこういった実践を重ねて、学校全体での人権学習の充実を図りたい。



学習、写真を使った発表などに活用している他、「viscuit」でのプログラミング学習も実施している。これからの時代に必要とされるツールであり、今後も積極的に活用して授業の活性化を図りたい。

②図書室のリニューアル
本校には毎月一回、移動図書館車が来校し、児童はそこでの本の貸し出しを楽しみにしている。しかし、校内にある図書室の利用者は少なく、せっかくの蔵書が児童にあまり読まれていない現状があった。

そこで、図書室の利用者数を増やし、児童にもっと本に親しんでもらうため図書室の環境を一新することとした。市から派遣されている図書館サポーターの先生の協力のもと、古い本の整理と廃棄、図書室の掲示環境の改善などを順次行った。また、児童が思わず手にとってみたくなる本をサポーターの先生に選定していただき、購入した。蔵書の並べ方も工夫し、それまでどちらかと言えば薄暗いイメージであった図書室を、明るく居心地の良い場所に変えることができた。



①児童用タブレットの導入
本校はもともWi-Fi環境が整備されていたが、さらに使用できる範囲を広げた。そして、教師用に一台ずつだったタブレットを新たに十三台購入し、各学年で児童が一人ずつ一斉に使えるようにした。先進校の東みよし町の足代小学校へ、校長と教頭、六年担任がそれぞれ視察に行き、その中で、本校でできるICT教育は何かを見極めたり、全教職員で研修を行ったりした。

各学級では「コラボノート」を使った話し合いや、調べ

「図書室クイズ」実施の効果もあり、それまで一日五、六人だった来室者数が二十名前後に増え、学校全体の読書冊数も増加した。

④さまざまなかかわりをとおして

本校の教育活動は、地域のさまざまな方々に支えられている。紙面の都合上、それらすべてを紹介することはできないが、そういった「人とのかかわり」をさらに有意義なものにしたいという思いから試みた事例を二つ紹介する。

①桑野川EM研究会の方々とのかかわり

本校は毎年、EM菌を使ったプール清掃を行っている。その際にお世話になっているのが桑野川EM研究会の方々である。これまではただ話を聞くだけの形であることが多かったのだが、昨年度、新しい取組を試みた。

春、EM菌をプールに投入するときに、環境問題について研究会の方に教えていただいた後、自分が関心をもったテーマについて調べ学習をする。秋にもう一度研究会の方に来ていただき、調べて分かったことを発表する。児童は調べたことを研究会の方に聞いていただくという目的意識をもって主体的に学び、その成果に対する賞賛やアドバイスを直接受けることで達成感を得る。担任よりはるかに環境問題について博識である方との双方向的なかかわりは、児童にとって貴重な体験となった。



②鳴門教育大学留学生の方々とのかかわり
本校は一昨年度と昨年度、鳴門教育大学の留学生の方々

との交流会及び研修会を行った。その際の四年生の教科横断的な取組を紹介する。

児童らは、交流会の司会進行をするにあたって、どこの国出身か、英語が通じるのか、何をすれば喜んでもらえるだろうかなどについて、まず学級活動で話し合い、計画を立てた。さらに、挨拶の言葉は自分たちで考え、担任が英語に翻訳したものを、どのように話せば伝わるかをアドバイスしながら外国語活動の時間に練習した。和紙を染めて作ったプレゼントは図工の時間を使って用意した。



交流会を成功させるという目標のもと、教科横断的な取組の中で、児童らが主体的に学習活動をすすめることができた良い事例となった。

④おわりに

予測不能なこれからの社会で必要とされる問題解決の力を、学校の中だけで育成することは難しい。だからこそ、文部科学省の描く、専門能力スタッフや地域の方々を巻き込んだ「チームとしての学校」の実現がもとめられる。小規模校であるがゆえのフットワークの軽さ、豊かな自然環境と協力的なスタッフや地域人材を強みに、これまで以上に「チーム山口」を充実させ、よりよい教育活動を模索していきたい。(文責—山口小学校教諭)